

# なくなつた尼寺あま であ

むかしむかしのこと。

近ちか崎村に尼寺があつたと。そこにはひとりの尼さんがおつて、寺を守つてござつた。信仰心の厚あつい人でのう。朝早く本堂の仏ほとけさまの前でお経きやうをあげることから一日が始まり、仏さまに仕つかえることを一生の仕事と信じてくらししていたそう。寺の前を通りかかると、いつでも中から尼さんの静かな経文きやうもんを唱える声が聞こえるので、村の人々もつい立ち止まつて両手を合わせるのであつた。

ところが、信仰心の厚いこの尼さんも病には勝てず、とうとうねこんでしまつた。日に日にやせおとろえていく体で、ただただ考えるのは寺のことばかり。お見舞みまいに来てくれた人にも、

「私は長年、御仏みほとけに仕えることを思い、仏の道に一步でも近づかんと努力してまいりましたが、志こころみなかげで、あの世にめされることになつてしまいました。そこで、なんとしても心残りなのは、私が死んだ後のこの寺のことでございます。」

と語つては、なみだぐむ毎日だつた。それを聞いた人々は、改めて尼さんの徳とくの高さを

に心をうたれ、

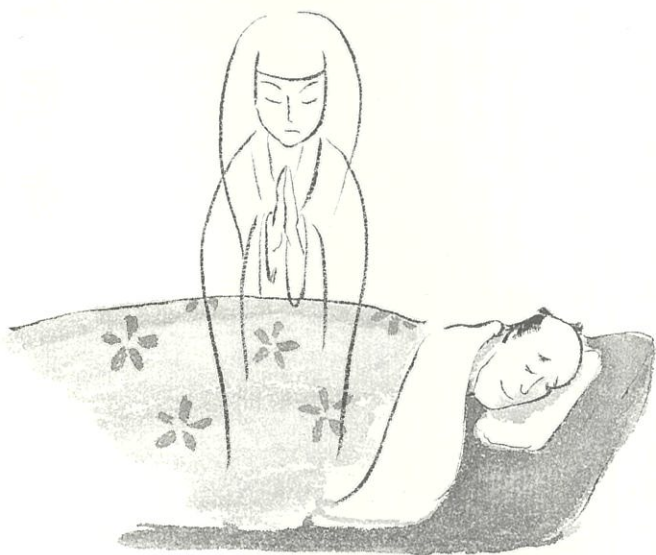
「寺のことは心配せんでいいから、早う、ようなつてくたさい。」

「寺はみんなで守つていくべえ。」

と、口々に尼さんをはげまし、お見舞いの人があとをたたなかつたそうな。しかし、みんなの願いもむなしく、尼さんは静かに息をひきとられた。

尼さんがいなくなつてから、村の人々はその日その日のくらしに追われていて、すっかり尼さんとの約束を忘れてしまつておつた。寺は長い間、住む人のいないままにあれ果てて、見るかげもなくなつていった。そんなある日のこと、村の老人が、

「こんなに寺をあれほうだいにしておい  
ちやあ、死んだ尼さんも心安らかに成じょう



仏できまいぞ。」

といい出し、みんなで話し合った末、ひとりの男の人が寺守りをする事になった。村人たちも協力して本堂のいたんだところをなおし、山門にも手を入れて、その男の人は寺に住みはじめた。

ところがある夜のこと、寺守りが、ねようと床についたところ、

「そなたにお願いがあつて参りました。」

というか細い声があるので、びつくりして飛び起きたところ、まくら元に体のすきとおつた尼さんが立つておつた。

「こ、こりゃあ……。どうしたわけじゃ。」

と、おどろきの声を上げる寺守りに、

「どうか、この寺をあなたのお力で末長くお守りくださるように。」

とだけいって、尼さんの姿はすうと消えてしまった。寺守りは悪い夢でも見たかなとほおをつねってみたが、痛い痛い。これは夢でなかったと思いなおし、気味が悪くなつて、はて、どうしたものかと考えた。だれかに相談しようかとも思ったが、信じてもらえそうにもないと思いとどまり、ひとりなやんでおつた。

あくる晩のこと、昨夜のことを考えるとねつかれず、ふとんの中でねがえりをうち

ながら、あれやこれやと考えているうちに、それでもつかれていたとみえて、うとうととねむりにおちたらしい。物音にふつと目を覚ました。もしかしてと思い、起き上がってみると、昨晚と同じようにすきとおった姿の尼さんが悲しそうな目で、寺守りの方をじつと見ておった。そして、すんだきれいな声で、

「私はこの寺で仏さまにお仕えしていた尼です。寺の行く末を思うとなかなか成仏できません。どうかあなたさまがこの寺を立派りっぱに守つていかれるとお約束ください。」  
といった。寺守りは、尼さんのしんけんな姿に心を動かされ、

「承知しょうちいたしました。御仏に仕え、寺の建物やかきねのいたんだところには手を入れ  
て、しっかりと守つていこうぞ。」

と、とつさに答えていた。すると、尼さんはほつとしたようにほほえんだかと思うと、すうつとその姿が見えなくなった。

寺守りは、二、三日は自分ひとりの心の中で思いなやんでいたが、二度も同じ夢を見るわけがない、これはまことのことだと考えて、寺の親類しんるいの家に出かけてそのことを話したそうなの。そのうわさは人の口から口へ伝わり、村の人は、尼さんを供養くようせねばと話し合った。そして、寺の境内けいだいの西の角にお地藏じぞうさんを祭つたそうなの。しかし、二度までも、まくら元に死んだはずの尼さんを見た寺守りは、なんとも気味悪がつて、

「とても、わたしにはこの寺を守っていく自信がない。許ゆるしてください。」  
と、寺を出てしまった。そして、だれからいともなく『尼寺のお化け』の話は広まっていた。

「あの寺にはお化けが出るそうなの。」

「そうそう、なんでも尼さんが化けて出るとのことじゃ。」

「なんとも気味の悪いことよのう。」

「からだのすきとおったお化けじゃと。」

と、人々は顔を合わせるたびに、そういつてうわさし合ったと。

それからというもの、おそろしがってこの辺りに近づく者はだれひとりなく、寺はあれるにまかせていったそうなの。

北崎地区に伝わる話です。  
近崎村の尼寺にかかわる悲しい話ですが、寺がどこにあったのか、今ではわかりません。